



車で走っていると道端に咲いているかわら撫子を見つけた。

わたしは車から降りてじっとみつめた。

幾分濃い目のピンクが、青空に映えて美しい。

夏の暑さにも負けないでいる強さとやさしさに、私は癒された。

というのも、長年飼っていた愛猫「みーこ」に旅立たれたばかりだったからだ。

*

みーこは、21年と数か月いた。

人間でいうと100歳をとうに過ぎていたことになる。

みーこは家族以外の手に抱かれるのを極端に嫌がる猫だった。

誇り高い猫だった。

数年前から夜泣きする、便秘がち、いつも寝ているといった傾向があった。

しかし倒れるまではいたって健康であったような気がする。

*

7月11日午前10時過ぎ。

いつも迎えてくれるミーコがいなかった。

探しに出ると、家の下の花畑であえいでいた。

放っておくと熱中症で死んでいただろう。

*

動物病院の先生にすぐに連絡した。

先生からは、

「風通しのよい場所に移しなさい」

そして、

「呼吸が落ち着いたら知らせて」

と指示を受けた。

昼過ぎ、みーこは落ち着きを取り戻したようであった。

診察を受けるかどうか指示を受けるため、再び先生に電話した。

先生からは、

「すぐに動かしてはいけない。

無理に動かすと脳梗塞になったりして、半身不随になることもあるから」

といわれた。

結局、みーこの受診は19時半頃となった。

*

「・・・うん、

落ち着いてるね。

でも、目が見えてない。

かすかに光が見えているくらいだな」

診察のあと先生はこう言った。

愕然とした。

実は、最近のみーこは粗相をよくした。

なぜだろうと思っていた。

でもそれは、トイレ場所がわからなくなっていたからだと、この時ようやく理解した。

*

先生が親切にケージを貸してくださり、そこでみーこは生活することとなった。

でも次第に元気がなくなり弱っていった。

水をあげたらもどしてしまうようになった。

また先生に相談すると、

「自然にしてあげよう。お薬もやめよう」

と仰った。

私も静かに見守ってあげようと思った。

でも私は「みーこ」と声をかけたり体をなでたり、

少しでも涼しく、景色が見えるようにと縁側に連れて行ったりした。

本当は、みーこは人のいない場所でゆっくり休みたかっただろうと思うのに・・・。

*

みーこがほとんど食べれなくなった3日前から、私は夜間傍らに寝た。

みーこに何かあったら心配だった。

そうすることが私の独りよがりの安心だった。

*

最期の朝が来ていた。

7月28日午前2時半頃。

みーこの呼吸が速くなっていた。

みーこ、と小さく言いながら頭をなでると、

私の手の平をグイグイと力を入れて押してくるのだった。

私は心がしめつけられ、目頭が熱くなり、涙でいっぱいになった。

*

それから、2時間後の4時40分。

みーこの呼吸がゆっくりになっていた。

ああ、もうそろそろかな・・・。

そう思ってからそれほど経たずに

みーこは最期の空気をかみしめるように呼吸をし、

そのあと無音になった。

後でこの様子を先生に伝えたと、老衰ですと言われた。

「世話が出来てよかったな。突然だったら、もっと悲しいよ」

とって慰めていただいた。

みーこ、ありがとう。

みーこは心の中にいます。

ずっとずっと。

*

道端に咲いていたかわら撫子がまだ咲いているかなあ。

また、見に行きたいなあ。



みーこ —100年を生きた猫—

<http://p.booklog.jp/book/108891>

著者 : ai3610219

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/ai3610219/profile>



感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/108891>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/108891>



電子書籍プラットフォーム : ブクログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ

